

## 平成18年度テーマ展

# 時代のものさし

## ～弥生時代～

### 展示遺跡の紹介(主要遺跡)

#### 3. 持田町3丁目遺跡(松山市持田町)

松山市北東部の石手川右岸に立地しています。発掘調査では2列に並んだ墓が見つっています。墓は大人用の土坑墓と、子供用の壺棺墓という2種類があります。このうち土坑墓には管玉や磨製石剣・小壺などが副葬品として収められていました。管玉や磨製石剣は愛媛では採れない石材で、北部九州や山口などから持って来たものと考えられます。また、墓を2列に並べることや、小壺を供えることなども北部九州の墓とほとんど同じで、持田町3丁目の墓に葬られた人々は九州から渡って来た人か、あるいは、その子孫ではないかと考えられます。



土坑墓に副葬された小壺

副葬されていた小壺や子供用の棺に使われた大型壺は前期の土器で、そのいくつかは「遠賀川系土器」と言われるものです。壺の口縁部は緩やかに湾曲した「如意形」で、頸部は太く、上へ向かって「ハ」字形にすぼまるという特徴をもっています。「遠賀川系土器」は北部九州から東北地方まで各地で見つかり、北部九州から発した弥生文化が東へ向かって伝播していった証拠と考えられています。持田町3丁目遺跡の土器からは「遠賀川系土器」が、世代を重ねるごとに愛媛独自の形へ変わっていく様子が見てとれます。

#### 4. 宮前川別府遺跡(松山市別府町)

松山平野西部の低地に立地し、東に岩子山、西に弁天山といった独立丘陵に囲まれています。周辺には、弥生時代後期から終末にかけての集落である宮前川北斎院遺跡があります。

発掘調査では土坑・溝・杭列などが見つっていますが、住居は確認されていません。遺物では前期末から中期初頭にかけての土器などが見つっています。本遺跡は海に近い場所にあり、九州の影響を受けた土器なども見ついていることから、松山平野の海の玄関口としての役割を担っていた集落だったかもしれません。

出土した土器は、壺の口縁部内面や甕の胴部に櫛歯状の工具で直線や山形の文様を描いたり、細い粘土紐を貼り付けて飾りたてています。形も時期も今治市の阿方遺跡の土器とよく似ていますが、阿方遺跡ほど派手に飾りたてないところが



大量の土器が出土した土坑

松山風と言えるかもしれません。

## 6. <sup>いわいだにはたけなか</sup>祝谷畑中 遺跡 (松山市祝谷)

松山平野北部の祝谷に位置し、<sup>じょうしんじ</sup>常信寺山から西へ張り出す尾根の先端部付近に立地しています。

発掘調査では尾根を断ち切る大溝が見つっています。この大溝は集落を外部から隔てるためのもので、「<sup>かんごう</sup>環濠」と呼ばれています。祝谷畑中遺跡の環濠は幅10m以上、深さ3m以上で、溝の大きさでは日本有数の規模を誇ります。環濠の中には中期前半頃の土器が大量に捨てられていました。また大溝近くの高穴住居からは「<sup>どくう</sup>弥生土偶」も出土しています。



彌生土偶

この時期、今治平野では派手に飾りたてる壺が少なくなるのに対し、松山平野では長い頸部に<sup>とつたい</sup>突帯を何重にも巡らせ、大きく開いた口縁部の内側を突帯や<sup>ふもん</sup>浮文などで飾りたてる壺

が多く作られています。この頃から東予と中予で、土器作りにはっきりとした違いが見られるようになっていきます。

## 8. <sup>きしはいじ</sup>来住廃寺 (松山市来住町)

松山平野東部に位置し、北に高縄山地からのびる丘陵がせまり、南西方向には広い平野が開けた来住台地上に立地しています。

来住廃寺は、<sup>ほうりゅうじき</sup>法隆寺式の<sup>がらん</sup>伽藍配置をもつ7世紀後半の寺院跡で、周辺には7世紀代の古代の役所(<sup>かんが</sup>官衙)に関連する遺跡が広がっており、久米官衙遺跡群とともに国指定史跡になっています。来住台地ではこれら古代遺跡のほかにも、弥生時代のほぼ全期間を通して人びとが生活していた集落遺跡も多数見つかり、15次調査では中期末の土器がまとまって出土しています。

中期末の土器の特徴は、壺や甕の口縁部などに巡らせた<sup>なみいた</sup>波板状の太い線(<sup>おうせんもん</sup>凹線文)にあります。甕は胴部が大変薄く作られ、口縁部は小さく上に跳ね上がって口縁の端に凹線文を巡らせます。この時期の土器には精美で洗練された印象のものが多く見受けられます。凹線文土器は中部瀬戸内を中心にして西日本全体に広がりをもち、愛媛では中予よりも東予がその影響をより強く受けているようです。このように、他地域の強い影響を受けてはいますが、高杯の脚部に描かれた「<sup>やばね</sup>矢羽根」形の文様などは愛媛独自に発達した文様と言えます。



土器が並べられた溝

## 10. <sup>いどいち</sup>井門I 遺跡 (松山市井門町)

松山平野中央部に位置し、東から西に流れる重信川右岸の平野部に立地しています。発掘調査では後期末の溝が見つかりました。この溝は幅0.6～1m、長さ約26mで真っ直ぐのびています。溝の中からは、壺・甕・鉢・高杯など多量の土器が溝一杯に出土していますが、それらの土器は完全な形のままのものがほとんどです。出土の状況からみて、これらの

土器は、人の手で溝に並べられたものと考えられます。

壺には、<sup>ふくごうこうえんつば</sup>複合口縁壺とよばれる口縁部が「く」字形に内側に折れ曲がったものがあります。また、甕の胴部は肩が強く張っていて、形作るときにたたきしめた「タタキ」とよばれる調整技法の痕が見られます。このタタキ技法は後期の終わり頃、甕を作る際に西日本各地で用いられた特徴的な方法です。

西部瀬戸内では後期中頃から後半にかけて、複合口縁壺や特殊な<sup>きだい</sup>器台などに象徴されるひとつの地域としてのまとまりが生まれ、古墳時代を迎える直前までその地域色を保持し続けます。

### 13. <sup>まつやまだいがくこうない</sup>松山大学構内遺跡 (松山市文京町)

松山平野の北東部に位置し、高縄山地から南西方向に流れ出る石手川右岸の平野部に立地しています。松山大学東隣にある愛媛大学の敷地には、<sup>ぶんきやう</sup>文京遺跡という中期末から後期前半にかけての大集落がありますが、松山大学では、文京遺跡より少しあとの後期初頭から中頃にかけてと、後期末から古墳時代初頭の住居・溝・<sup>どきだ</sup>土器溜まりなどが見つかっています。

後期初頭の土器は、川の跡から壺・甕・鉢・高杯・器台などがまとまって見つかっています。甕は「く」字形に折れ曲がった口縁部をもち、中期末頃の凹線文土器の甕と比べると、作りが極端に雑になっています。また、壺・甕・高杯などにつけられた凹線文はあいまいになり、中部瀬戸内からの影響が弱くなっていきます。

後期中頃の土器は住居から見つかっています。壺の中には複合口縁壺があります。複合口縁壺は後期に山口や大分など西部瀬戸内で一般的に見られる壺です。

後期になると、瀬戸内沿岸に強い影響をもっていた凹線文土器は衰退し、新たに各地域で独自の土器が作られるようになっていきますが、愛媛でもこの時期にその始まりを見ることができます。

### 14. <sup>みやまえがわきたさや</sup>宮前川北斎院遺跡 (松山市北斎院町)

松山平野の北西部を流れる宮前川の下流に位置し、河川改修や道路建設などにもなって、これまでに何度も発掘調査が行われています。発掘調査では古墳時代初頭から前期にかけての土器が数多く出土しています。

古墳時代初頭には、それまで使われてきた愛媛独自の土器に加えて、新たに近畿地方の土器が入ってきます。近畿地方の土器には<sup>ふるがた</sup>布留型と呼ばれる胴部が球形の甕や、壺・高杯・小型の鉢・器台などがあり、また、山陰地方からも器台などの土器が入ってくるなどして、他地域からの強い影響を受けて、古墳時代の前期には愛媛独自の土器がほとんど見られなくなってしまいます。

古墳時代初頭には愛媛ばかりでなく、西日本各地に<sup>いっせい</sup>一斉に近畿地方の土器の影響が広がっていきますが、これらの土器の受け入れ方はどこでも同じというわけではなく、遺跡の立地条件などによっても微妙に異なっているようです。愛媛では海辺に営まれた宮前川北斎院遺跡で、いち早くこれらの外来の土器が受け入れられたようです。



大量に捨てられた土器

## 15. <sup>あがた</sup>阿方遺跡 (今治市阿方)

今治平野北部の<sup>ちかみ</sup>近見山からのびる低い丘と小さな谷が入り組んだ低地に立地しています。阿方遺跡は「阿方貝塚」として、古くから全国的に知られていた遺跡です。発掘調査では丘の斜面から、壊れて使えなくなった土器や石器、あるいはイノシシやシカなど食料にした動物の骨などが大量に見つかっています。



大量に捨てられた土器

こうした遺物は1m以上もの厚さに堆積していて、最も下の層からは前期の土器が、最も上の層からは前期末から中期初頭にかけての土器が出土しています。前期の土器は「遠賀川系土器」と言われる北部九州から伝わってきた土器で、北部九州の土器と非常によく似た形をしています。前期末から中期初頭にかけての土器は「阿方式土器」と言われるもので、甕は口縁部を水平に作る「瀬戸内型甕」、壺は上半部分、特に大きく開いた口縁部の内側を派手に飾りたてるといった特徴的なものです。阿方遺跡の土器からは、北部九州を出発した弥生土器が、愛媛に伝わって、愛媛の風土や人々の美意識によって、愛媛独自の土器が作られるようになった過程を垣間見ることができます。

## 17. <sup>やたはったんつぼ</sup>矢田八反坪遺跡 (今治市矢田)

今治平野北部の<sup>ひだか</sup>日高丘陵から北へ流れる<sup>あさがわ</sup>浅川流域の低地に立地しています。発掘調査では蛇行しながら流れた川の跡が幾筋も見つかっています。これらの川の跡からは縄文時代後期から古墳時代後期までの遺物が出土していますが、中でも弥生時代中期前半の土器や石器がたくさん見つかり、



川に捨てられた豎杵

<sup>きたとなり</sup>北隣の阿方遺跡が衰退してゆくのと入れ替わるように、矢田八反坪遺跡周辺に集落が営まれるようになったと考えられます。また、川の中からは木で作った<sup>くわ</sup>鋤や弓などとともに<sup>だっこく</sup>脱穀に使った<sup>たてぎね</sup>豎杵といった珍しいものも見つかっています。

この時期の今治地方の土器は「阿方式土器」で特徴的だった大きく開く口縁部の内側を飾りたてるような壺が少なくなり、口縁部の開きが小さく、飾りも簡素なものになります。甕の口縁部は水平なものから「く」字形に折れ曲がって、胴部が丸く膨らみをもった形に変わっていきます。

## 19. <sup>さえだ</sup>久枝遺跡・<sup>さえだに</sup>久枝II遺跡 (西条市周布)

西条市周布に所在する久枝遺跡と久枝II遺跡は、道前平野を形成する主要河川である中山川左岸の沖積低地に立地しています。

発掘調査では中期前半の豎穴住居と土坑が見つかりました。

久枝 II 遺跡では中期中頃から終わり頃にかけての<sup>ほうけいくかくみぞ</sup>方形区画溝や<sup>たてあな</sup>堅穴住居をはじめ、多くの遺構とおびただしい量の弥生土器が見つかりました。久枝 II 遺跡の集落は中期中頃から終わり頃にかけて栄えた大きな集落で、出土した<sup>ぶきがたせつき</sup>武器形石器や中国大陸の影響を受けたと考えられる<sup>せきせいゆびわ</sup>石製指輪などから、有力な<sup>しゅちょう</sup>首長の存在がうかがえます。また、他の地域から持ち込まれた弥生土器なども出土しており、広く周辺地域と活発に交流していたと考えられます。こうしたことから久枝遺跡や久枝 II 遺跡を含む「久枝・<sup>がくれんじ</sup>願連寺遺跡群」は道前平野における中期の中心的集落と位置づけることができます。



石製指輪

## 20. <sup>あがたずおう</sup>阿方頭王遺跡群 (今治市阿方)

今治平野北部の近見山からのびる低い丘陵の斜面に立地しています。周辺の低地には、「阿方式土器」で有名な阿方遺跡や、弥生時代から中世にかけての集落である阿方牛ノ江遺跡群など多くの遺跡が存在しています。

斜面を削って造られた平坦面(<sup>だんじょういこう</sup>段状遺構)や溝からは、中期後半頃の壺・甕・高杯などの土器が出土しています。それらのほかにも、マツリに使われたと考えられる<sup>ふんどうがたせいひん</sup>分銅形土製品や、ジョッキ形の土器、矢じりや斧などの石器類も数多く見つっています。また、段状遺構からは、<sup>しょうど</sup>焼土や<sup>いたじょうてつぱ</sup>板状鉄斧などの鉄製品が見つっています。このことから、阿方頭王遺跡の集落では鉄製品などの生産が行われていた可能性も考えられ、周辺の低地にある集落とは違う特別な役割を受け持っていたのかもしれませんが。



段状遺構から出土した弥生土器

出土した土器は、凹線文土器と言われるもので、中部瀬戸内の影響を強く受けたものですが、高杯の脚部を飾る「矢羽根」形の文様は、この時期の愛媛の土器に見られる独自の文様と言えます。

## 21. <sup>あさくらなんこう</sup>朝倉南甲遺跡 (今治市朝倉村南甲)

<sup>とんだがわ</sup>頓田川の支流である<sup>こうだいしがわ</sup>高大寺川によって形成された河岸段丘上に立地しています。発掘調査の結果、後期から古墳時代初頭頃にかけての多数の住居や土坑・溝などが見つかり、小規模ながら比較的長期間にわたって営まれた集落であることがわかりました。住居には円形・<sup>ほうけい</sup>方形・多角形と色々な形のものがあり、それぞれの住居からは後期前半頃と終末から古墳時代初頭にかけての土器が多量に出土しています。

後期の土器は、それまで使われていた中期の土器に比べると<sup>そうしよく</sup>装飾(凹線文など)が少ないシンプルな作りになっています。また、<sup>にた</sup>煮炊き使用する甕は底部が小さくなって<sup>すわ</sup>座りが悪くなり、これを支えるために<sup>しきやく</sup>支脚という新しい道具が出現するのもこの時期の特徴です。終末になると、複合口縁壺が登場し、甕の底部は完全な丸底となって、作りもより雑なものになっていきます。また、この時期には地元の土器のほか



9号住居から出土した弥生土器

にも近畿地方・山陰地方・吉備地方(岡山)などから土器が持ち込まれるようになり、当時、これらの地域の間で盛んな文化交流が行われていたことがうかがえます。

## 22. <sup>たかはし</sup>高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡 (今治市高橋)

今治平野北部の日高丘陵の谷間に立地しています。発掘調査では蛇行して流れた川の跡が幾筋も見つかっています。この川の跡からは旧石器時代から古墳時代にかけての土器や石器がたくさん見つかりました。中でも後期前半の土器は完全な形のまま残っているのものが多く、中にはわざと胴部や底部に孔を開けて使えなくした壺なども含まれています。



川の跡から出土した壺

壺は凹線文が退化して、あいまいで雑な作りになりますが、頸部に突帯を貼り付けたり、「ノ」字形の文様を描くなど、中期の土器の名残も見られます。

## 24. <sup>だんのうえ</sup>旦之上遺跡 (西条市旦之上)



溝に捨てられた土器

道前平野北部、<sup>だいみょうじんがわ</sup>大明神川左岸の自然堤防上に立地しています。北側の丘陵には<sup>どうけん</sup>銅剣が出土した<sup>てんじんたに</sup>天神谷遺跡があり、当時この地域は先進的な文化をもっていたと考えられます。

発掘調査では前期から後期にかけての住居・溝・土坑などが見つかり、弥生時代のほぼ全期間を通して営まれていた集落であることが明らかとなりました。このうち、住居がある居住空間から少し離れた場所に掘られた溝からは、捨てられた多量の土器が見つかっています。

この溝から出土した土器は後期のもので、胴部が卵を逆さにした形(倒卵形)の甕や、口縁部が外へ向けて大きく<sup>そ</sup>反り返った高杯などがこの時期の土器の特徴と言えます。また、壺は文様を施さないシンプルなもので、中期から後期にかけて、土器作りが大きく変っていった様子がみてとれます。

## 26. <sup>よむらひもと</sup>四村日本遺跡 (今治市四村)



溝に捨てられた土器

今治平野西部に位置し、市内を流れる<sup>そうじゃがわ</sup>蒼社川右岸の自然堤防上に立地しています。発掘調査では後期から終末にかけての住居・溝・土坑などを発見しました。周辺一帯には、ほかに<sup>よむらがくがうち</sup>四村額ヶ内遺跡など同時期の遺跡が多数確認されており、当時、この地域一帯には広範囲に集落が営まれていたものと考えられます。

後期の土器は朝倉南甲遺跡のものとよく似ていますが、甕では倒卵形のものから胴部の中央が膨らんで、ラグビーボール形のものへと変化し、さらに終末になると胴部が球形に近

くなるというように、徐々に土器の形が変化していった様子がうかがえます。また、山陰地方の土器が出土した終末の住居の形は、この地域に従来からある円形ではなく方形であることから、山陰地方からの移住者が生活していた可能性も考えられます。

## 27. <sup>そまだいけだ</sup> 杣田池田遺跡 (今治市杣田)

今治平野北部の近見山からのびる谷間の低地に立地しています。発掘調査では後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居が見つかりました。竪穴住居の大きさは、一辺2～3m程度の小型のものから、7mを超える大型のものまで様々です。住居の近くで終末から古墳時代初頭にかけての土器溜まりが見つっています。これらの土器の多くは破損して捨てられたものですが、中には完全な形もあります。また、土器に混じって動物の骨なども出土しています。



土器溜まり

出土した土器には複合口縁壺・広口壺・甕・高杯・鉢・支脚などが見られます。甕は胴部が球形になって、底部が極端に小さくなり、胴部全体にタタキ技法の痕が残る雑な作りのものが多くなります。宮前川北斎院遺跡や朝倉南甲遺跡同様、他地域からの土器がたくさん持ち込まれて、愛媛独自の土器がほとんど見られなくなってしまいます。

### [用語の説明]

**土坑墓** <sup>どこうぼ</sup> 地面を掘りくぼめた穴(土坑)に遺体を収めた墓。もともと遺体を収める木の棺や特別な施設があっても、腐って残っていないなどの理由で、確認できないものも土坑墓とよばれる。

**壺棺墓** <sup>つぼかんぼ</sup> 土器の壺を棺として使用した墓で、主に子供用の墓と考えられている。

**磨製石剣** <sup>ませいせっけん</sup> 金属の剣の形を真似て、石を磨いて作った剣。弥生時代前期に朝鮮半島から伝わった器物のひとつで九州で多く出土している。瀬戸内地域では、愛媛で最も多く見つっている。

**遠賀川系土器** <sup>おんががわけいどき</sup> 福岡の遠賀川底の立屋敷遺跡出土の土器から名付けられ、初期の弥生文化とともに九州から本州に伝わった弥生時代前期の土器で、「如意形」の口縁をもつ甕・壺・鉢とごくわずかの高杯で構成されている。

**如意形** <sup>にょいがた</sup> 如意とは仏僧が手に持つ「孫の手」のように曲がった頭と柄の部分からなる仏具である。緩やかに曲がる形が、弥生時代前期の土器の口縁部の形と似ていることから、遠賀川系土器の口縁部の特徴を表現する言葉として使われる。

**伽藍配置** <sup>がらんはいち</sup> 寺院の堂や塔など建物の配置の仕方の中で、法隆寺式・四天王寺式といった種類がある。法隆寺式は東に金堂、西に塔を置いて回廊で囲む。その寺院の時期や、寺院同士の関係を考える上で重要な視点になっている。

**官衛** <sup>かんが</sup> 古代律令時代に地方を統治するために置かれた役所で、国の中心に置かれた国衛(国庁)、郡に置かれた郡衛があり、現代に例えれば国衛は県庁、郡衛は市役所に当たる。国衛とその周辺の関連施設をさして国府ということが多く、愛媛では今治平野に伊予国の国府が置かれていた。

**ほうけいくかくみぞ**  
**方形区画溝** 集落の中で特別な場所を囲むことを目的に掘られた溝で、四角く溝をめぐらしたもの。久枝遺跡では方形区画溝の内部やその周りは、マツリの間など集落の中でも特別な場所であったと推測されている。

**ぶきがたせつき**  
**武器形石器** 武器の形をした石器で、実用の武器として使用されたものやマツリなどの道具として使用されたものがある。久枝遺跡では、石を磨いたり、打ち欠いたりして作った剣形の石器が見つかっている。

**かんごう**  
**環濠** 集落など一定の空間を囲む濠(堀)。濠に囲まれた集落を環濠集落という。環濠集落は縄文時代の終わり頃に、朝鮮半島から北部九州に伝わったもので、その後日本各地へ広がっていった。愛媛では前期末頃から中期頃にかけてみられる。

**どぐう**  
**土偶** 土で作った人形。東日本では縄文時代にたくさん見られるが、西日本では多くない。弥生時代のものは十数例しか見つかっていない。女性を表現したものが多く、人の生死に関わる儀礼などに使われたとされる。

**とつたい**  
**突帯** 粘土のひもを帯状に土器に貼り付けた文様。弥生時代には、壺の頸部に巡らせたり、口縁部の内側に文様を描いたり、飾りの文様として使われる。

**ふもん**  
**浮文** 粘土を丸めたり、棒のようにのばしたりしたものを土器に貼り付けた文様で、土器を飾りたてる効果がある。

#### 参考文献

- 田中琢・佐原真編 2002『日本考古学辞典』三省堂  
大塚初重・戸沢充則編 1996『最新日本考古学用語辞典』柏書房  
坂詰秀一編 2003『仏教考古学事典』雄山閣